

「中国報」(中国レポート 第十一号)

おすすめ書籍 (番外編)

～新型コロナ禍の出張不可能状態のため番外編：おすすめの中国関連書籍情報～

セレモニー

王力雄著 金谷譲訳 藤原書店

2022年1月29日付の日本経済新聞の春秋で「現状を予見したかのような恐るべき小説」として紹介されているのを目にし、気になって読んでみたのが本書。コラムの春秋でも大まかなあらすじが紹介されているが、中国のテクノロジーを駆使した現代の監視システムをベースに、全体主義国家がいかに民衆を管理しコントロールしようとしているかを、権力争いを絡めて描いた「政治ファンタジー小説」である。

中国語の幻想(ファンタジー)小説は、SFも含まれ、政治SF小説のほうがしっくり来る。

春秋のコラムでは、中国は「ゼロコロナ」政策を貫くつもりらしい・・・と書かれているが、この「中国報」執筆中の4月初旬はまさに貫き通している最中で、2,600万人の巨大都市上海で、大規模なロックダウンが実施されている真っ最中である。

著者の王力雄は、1953年5月2日吉林省长春市生まれで、まさに文革に翻弄された世代。ウィキペディアによると現在も中国国内在住のようで、2015年12月に日本に向けて出国しようとしたところ、北京空港で出国阻止されている。

本書は2015年に構想し、2017年に台湾で繁体字版が発刊され、日本では2019年の5月に発刊されている。つまり新型コロナ感染症のパンデミックの発生前に書かれたものであるが、感染症対策の国家、社会の動きも詳細に描かれており、新型コロナに対する感染症対策と錯覚してしまうほどリアルだ。ただ、防疫措置は本書の本筋ではないが。

これまでならこの手の書籍は、香港でも出版され、その後裏ルートで本土に流れ込み浸透していくというのが、よくある流れだったが、今日現在香港では出版されていない。おそらく国家安全法が施行された香港では、未来永劫出版されることはないかもしれない。

著者は、「セレモニー」の中の社会を、「全体主義は日ごとに厳格さと緻密さを加え、それに挑戦する勢力は日ましに衰え、独裁は永遠となりつつあるかのような観を呈し、何かの変化が可能とは思えない状態」と規定しているが、「独裁的支配者の持つ現代のテクノロジーが統治者と被統治者の関係を根本的に変えた」中国社会の現状を見ると、独裁が強まれば不満分子が集まってそれが大きくなりとなり社会に変革を促す、という過去の経験をもとに現在の政権の行く末を推し量るといことは、かなり難しいようにも感じる。

ただ、独裁メカニズムには信仰や忠誠が存在せず、そこにあるのは利益と恐怖による結びつきであると著者はいう。そのため、本書ではテクノロジーによる独裁メカニズムが内部からの破綻により崩れていくのだが、現実社会にも起こりうることなのだろうか。

また、著者はテクノロジーの要素を欠いた民主主義—普通選挙、多党制、言論の自由など—は、テクノロジーによる独裁に太刀打ちできないという。この点でテクノロジーの要素を欠いている我が国は、このままで大丈夫なのかなどと余計な心配をしてしまう。

今回は、感染症の流行とテクノロジーによる監視社会と全体主義国家のゆくえ、という「身近な」テーマを扱った、中国の政治SF小説を取り上げてみました。

(2022/04 森山博之)

本レポートに関する問い合わせ先：<https://arc.asahi-kasei.co.jp/contact/>